

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	橋 本 淳 也
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
抑うつ傾向者における意図的想起と無意図的想起の間の気分改善効果の違い			
論文審査担当者			
主 査	教 授	宮谷 真人	
審査委員	教 授	森永 康子	
審査委員	教 授	湯澤 正通	
審査委員	准教授	中尾 敬	
審査委員	研究員	金山 範明（産業技術総合研究所）	
〔論文審査の要旨〕			
<p>自分が体験した出来事や自分自身についての記憶を自伝的記憶とよぶ。自伝的記憶には感情的な体験が多く含まれ、ポジティブな自伝的記憶の想起には、ネガティブ気分の低減やポジティブ気分の向上のような気分改善効果があることが知られている。本研究は、自伝的記憶の想起が意図的（自ら思い出そうという意図を持って目標志向的に想起される）か無意図的（思い出そうという意図なしに想起される）かによって抑うつ傾向者の気分改善効果に違いがあることを実験的に示し、その違いが生じる原因を検討したものである。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第1章では、自伝的記憶による気分改善効果に関する従来の研究の概観と本研究の目的が示されている。抑うつ傾向者やうつ病患者を対象とした研究で、ポジティブ記憶の無意図的想起による気分改善が報告されている一方で、意図的想起に関しては、ネガティブ気分が低減せず、むしろ気分の悪化が生じる場合があることがわかっている。記憶の想起という日常的な出来事により気分が改善され得るとすれば、それを利用した介入に繋がる可能性がある。しかし現段階では、①ポジティブ記憶の無意図的想起による気分改善を報告した研究の多くは日常場面でのエピソードに基づいており、想起された記憶の内容以外の要因が統制されていないため、気分改善が記憶の想起そのものの効果であることが実証されていない、②想起意図の有無による気分改善効果を直接比較した研究がない、という問題がある。これらを踏まえ、本研究の目的として、①実験的に統制された状況下でポジティブ記憶の無意図的想起によって気分改善が生じることを示すこと、②抑うつ傾向者における想起形態による気分改善効果の違いについて検討することの2つが挙げられている。</p> <p>第2章では、無意図的想起による気分改善効果を実証するために大学生を対象として行った2つの実験が報告されている。研究1-1では、中性的音刺激とポジティブまたはネガティブな感情喚起画像の連合記憶を形成した上で、音の位置判断課題を実施し、ポジティブ画像と連合された音刺激を用いた課題の前後で気分の改善が生じることが示された。研究1-2では、単語を用いたビジランス課題を実施し、単語によりポジティブな自伝的記憶</p>			

が想起された場合とされなかった場合とで、課題前後の気分の変化を比較したところ、ポジティブ記憶が想起された場合のみで気分の改善が観察された。これらの結果から、自伝的記憶の無意図的想起そのものによる気分改善効果を実証された。

第3章では、大学生を抑うつ傾向の強さによって抑うつ高群と抑うつ低群に分け、意図的想起と無意図的想起の間の気分改善効果の違いを両群間で比較した2つの実験が報告されている。2つの想起形態を比較するために、研究2-1では、研究1-1の音の位置判断課題に、位置判断と同時に呈示音と連合した画像を意図的に思い出すことを求める条件を追加した。また、研究2-2では、研究1-2のビジランス課題に、呈示された単語から過去の自身の経験を想起するよう求める意図的想起条件を追加した。その結果、両方の実験で、抑うつ高群においてのみ意図的想起条件よりも無意図的想起条件で気分が改善していた。さらに、研究2-1、研究2-2では、実験参加者に意図的想起条件で想起にどのくらいの努力を要したかを尋ねた。抑うつ得点を説明変数、気分改善の程度を目的変数、想起努力を媒介変数とする媒介分析を行ったところ、研究2-2のみで、抑うつ傾向が高い者ほど意図的想起に努力を要し、それにより気分の改善が損なわれていることが示された。

第4章では、研究1と研究2で得られた知見を総合し、抑うつ傾向者では自伝的記憶の意図的想起と無意図的想起によって気分改善効果が異なり、無意図的想起のほうが気分改善につながることを示されている。また、研究2の媒介分析の結果から、抑うつ傾向者においてポジティブ記憶の意図的想起が気分改善を阻害するのは、うつ傾向者では意図的想起にかかる認知的負荷が大きいためであると述べられている。さらに、今後の課題として、①研究対象を非臨床群である抑うつ傾向者から臨床群のうつ病患者に拡大すること、②認知的負荷が記憶の意図的想起や気分改善に影響するメカニズムの解明、③無意図的想起を実験的に生じさせる手続きの改善の3つが挙げられている。

本論文は、次の2点で高く評価できる。

(1) 想起手がかりの感情価等を統制した実験的な手法を用いて、ポジティブ記憶の無意図的想起そのものが気分改善効果を持つこと、および抑うつ傾向者においては意図的か無意図的かという想起形態の違いが気分改善効果の有無を決める要因であることを実証した。検討の過程で、無意図的想起を実験的に生じさせる手続きを工夫してその妥当性を示し、今後無意図的想起の機能を実証的に研究するための手段を提供したことと併せて、学術的価値は極めて高い。

(2) 抑うつ傾向者において意図的想起の場合に気分改善が生じない原因が想起に要する認知的負荷の増加であることを示し、実行機能を向上させる訓練を実施することにより、ポジティブ記憶の意図的想起によっても気分改善が生じる可能性を示唆した。ポジティブな自伝的記憶を意図的にうまく思い出せるように介入することが、抑うつ症状の予防・治療に役立つことを示すものであり、臨床的意義は大きい。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和3年2月5日